

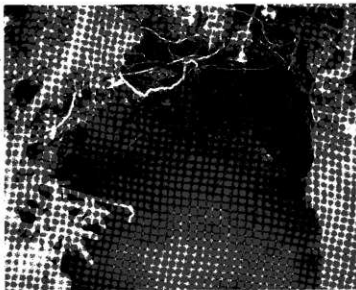
名主山遺跡

八千代市教育委員会

名主山遺跡

村上団地第1期工事区域内調査

昭和46年7月～8月



名主山清水（C3区南端）

目 次

1 遺 跡 概 要	
① 村上名主山遺跡概観	1
② 位置と分布	2
2 遺 構	
住 居 址	2
○ 住居址概説	3
(1) 弥生式文化期竪穴	3
(2) 平安時代竪穴住居址	3
倉庫址, 獨立小屋	
3 遺 物	
① 土 器	
○ 土器概説	8
② 金属製品	10
4 調査団員名簿	12

図 版 日 次

I 遺跡全面及び発掘地形図
II 遺構分布図
III 2号住居址平面図及び断面図
IV 3号住居址平面図及び断面図
V 5号住居址平面図及び断面図
VI D号倉庫址
VII 墨書土器(2号住居址出土)
VIII 墨書土器(3号住居址出土)
IX 墨書土器(5, 4号住居址出土及び表土採集)
X 1号, 2号住居址出土
XI 3号住居址出土
XII 5号住居址出土
XIII 6号住居址出土
XIV 6号住居址出土

1 遺 跡 概 要

① 村上名主山（なぬしやま）遺跡概報

本遺跡の地籍は、八千代市村上2054-1で、日本住宅公団の村上団地第1期工事区域内の埋蔵文化財発掘調査第3地点内に発見されたものである。村上団地第1期工事区域内には、その東北隅部分で、給食センターに接する第1調査地点、と上記名主山遺跡との中間に当る地点の第2調査地点があったが、全面表土はがしを実施したが、何等の遺構をも発見出来ず、遺跡は存在しなかったことが認められた。調査第3地点は果樹林（梨）と松林と畠地で、標高約27.30～27.60の洪積台地で、南は浸蝕谷をへだてて団地第2期工事区域の神明神社台地向合っている。谷の降り口に通称「名主山の水」という清水があり、谷の水田に灌漑していたことが判明し、この清水をかい掘り調査を行ったところ、弥生式久ヶ原期の土器片を認めたので、表土はがしを行った結果、弥生文化期の竪穴住居址と歴史時代土器、糸切り底部の土器器を出す平安時代（11世紀）の竪穴住居址6、倉庫址4、掘立小屋址2、の聚落遺跡を発見したのである。旧地主の証言により、此地域の山林を旧来名主山と呼んでいたことが判ったので、この遺跡を名主山遺跡と名付けた。



本遺跡の位置は国土地理院25000地形図N1-54-19-14-2（千葉14号-2）の南北隅、上高野工業団地の西側にあり、京成電鉄勝田台駅の北約1.5軒、国道16号線村上部落の東約1軒の下総洪積台地上に所在する。

村上には印旛沼の西端部に連る新川印旛沼水路の東に位置し、部落の中央に七百余所神社と正覚院（本尊清涼寺式釈迦像県指定有形文化財）があり、和名類聚抄（10世紀成立）に印旛郡村神郡と記載されているのは、村神が村上となったと考えられるもので、村神は村上であるとみられ、名主山遺跡は、平安時代の村神郡の名主の遺跡と推定されるものである。村神（むらかみ）は群神（むっかみ）の同義と考え、村社の七百

余所明神(ななひやくよそみよりじん)は、群神であるという、村名考証を岡岡良弼(日本地理志科)が行っているが、認めてよいと考える。本遺跡の周辺は、従来遺跡の分布は殆んど見られず、西方約2軒の普地に散布地「普地台」(文化財保護委員会全国遺跡地図、番号964号)が唯一ヶ所見られたのみであった。名主山遺跡調査中に、接続する台地に弥生式竪穴住居址一箇が盗掘によって発見されていたことを知った。

② 位置と分布

名主山遺跡の位置図



⊗調査地点

2 遺 構

① 住 居 址

○ 住居址概説

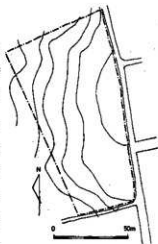
名主山遺跡で発見された遺構は、1. 弥生式文化期(久ヶ原式)竪穴住居址一箇、2. 平安時代竪穴住居址六箇、3. 平安時代倉庫址四箇、4. 平安時代掘立小屋址二箇であった。

名考
える。
當地
号)
台地
た。

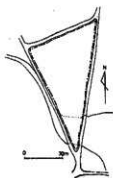
〔1〕 弥生式文化期堅穴（1号住居址）

名主山の湧水と呼ばれる台地の中腹の湧水の西側直上、松根に覆われた台地の舌状部に発見された。ロー層を約70層掘り回め、平面は楕円形で、長軸14.20米、横軸9.80米、柱穴は六個で、長軸に添って三個が二列に穿がられていた。伊は北端の柱の中間に焼灰を残してあったが、土器や石を用いることは無く、単純な穴だけのものであった。家の方向は南北に正中せず、軸線は30度東に偏っていた。出土遺物は極めて少く、堅穴中の北端部から、床に接して、久ヶ原式変形土器一箇を出土した。堅穴の南端部上層より、糸切底の土師器、銅製帯金具、須恵器等平安時代と推定される遺物を出土し、歴史時代住居の複合があつた

と見られたが、松の根のため攪乱されて、その遺構は明確に出来なかった。



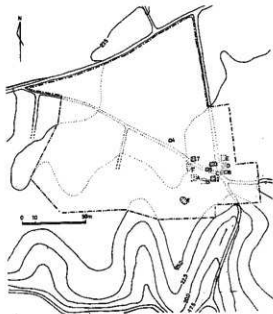
（↑調査地点A区）



（↑調査地点B区）

〔2〕 平安時代堅穴住居址 （2号～7号）倉庫址 （A・B・C・D号）掘立小 屋址（E・F号）

1号住居址の東北約40米の地点から2号堅穴住居址を発見し、2号の北約8米に3号堅穴住居址、3号の西約3米離れて5号堅穴住居址、2号の東側約5米離れてC号倉庫址 その又東に密着して6号堅穴住居址を発見した。6号の北4米離れてD号倉庫址、更にその北側2米離れてE号掘立小屋址が続いて発見された。2号、5号の西側を追及してA、B倉庫址とF号掘立小屋址を出し、F号より北2米離れて7号堅穴住居址を発見した。



（↓調査地点C区）

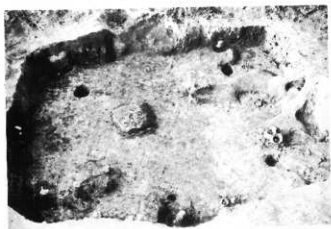
7号より西北約18米離れて第4号竪穴住居址が発見されたが、これは発掘開始の時、畝地であった関係で、表面の遺物散布によって遺構が推定されていたものであった。以上の遺構を観察すると、2, 3, 5号住居址を中心に囲んで倉庫と掘立小屋を東西に建て、6, 7号住居址は離れ家のように見え、更に4号住居址は最も規模が小さく粗末で階級的に下級なものと考えられる。

2号が最も大きく東西5.5米、南北6.0の方形にローム層を約60層掘り凹め、中央に東西2.6米、南北3.2米の間隔に四柱を建てた柱穴があり、竪穴の北壁に土へつついが築造されている。出土遺物も土師器類、漆器、鉄器等で墨書土師器もあった。

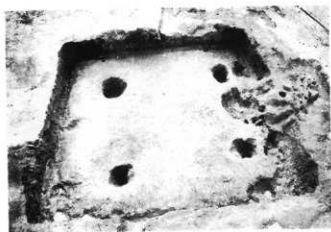
3号は東西4.5米、南北4.8米の方形で四柱穴は東西2.5米、南北2.5米の正方形で、かまどは北壁中央と東壁中央の2ヶ所に築かれている。出土遺物は2号とほぼ同様であった。5号は東西5.4米、南北5.5米の方形で、中央の四柱は東西2.9～3.2米、南北2.3米、東西両側の周溝の中に側柱穴と思われるものが2ヶ所穿たれ、かまどは3号と同じく、北壁と東壁の中央に築かれていた。出土遺物は、2, 3号とほぼ同様のものであった。

6号住居址はC号倉庫址の東側に接して竪穴を掘り、高床倉庫の下屋に築造されたものと推定され、竪穴内には柱穴が無く、竪穴の外、南側に約1米離れて1箇のF号柱の穴と推定されるものがあった。竪穴の大きさは最も小さく、東西3.0～3.2米、南北3.2～3.5米でかまどは北壁の中央に作られ、又北西の隅にも鏡土が見られ、そこから猿投窯の磁器が発見され、墨書土師器も出土した。

7号住居址はF号掘立小屋址の北側約3米離れて建てられたもので、東西4.8米、南北4.8米のほぼ正方形であるが、軸線は2.1.3.5号址かA, F号址と併行せず約15度東へ偏れている。かまどは北壁の中央と東壁の北側の部分の2ヶ所に作られ、柱穴は四箇であるが竪穴壁と正しく併行せず、ゆがんで穿たれ、東西2.6～2.1米、南北2.5～2.8米と不正形である。出土遺物は竪立の東南隅から砂岩で長さ約30㎝、上面の平らな石のまな板かと推定されるものが発見されたが、土器類の出



← 2号住居址



← 3号住居址



← 4号住居址

5号住居址→



倉庫址→



倉庫址→



土は殆んど稀薄で、完形土器は一個も出土しなかった。

4号住居址は、北に約20米も飛び離れて作られたもので、東南3米南北3.5米のゆがんだ方形で、柱穴は一箇で、堅立の掘り込みも他の堅穴は約60層位掘られて深いのに、この堅穴は約40層位しか穿たれていないで、出土遺物も稀薄(土器片のみ)で、名主山聚落の内最も階級の低い住居址と考えられた。出土遺物の内に粗製の磨製石斧が一箇あったが、付近に縄文遺跡があったとみられ、縄文土器片も表採出来たので、その混入か、或いは住居址の居住者が当時に捨得して使用したものかと考えられる。

② 倉庫址

A, B, C, D号の遺構は高床倉庫の柱穴群と推定されるものである。

A号は東西4.2米、南北5.2米の長方形で北側三穴、南側三穴、西側四穴が一直線に併ぶか、東側は第二列目の柱穴が東外にはづれ、中軸列の柱穴が3箇しか無く、横倉が整わないので、或いは高床倉庫でなく他の建造物を考えるべきかとも思われるが、柱穴の掘り込みも70層位の深いものなので、倉庫に想定した。B号は東西4.4米、南北5.0米で正しい長方形に3×4の柱穴が配列され、完全な高床倉庫址と考えられる。たゞしA号址と軸線が約15度西に傾いて構築されている出土遺物は表土から土器と須恵土器片が出た以外は無い。C号は東西3.6米、東北6.2米の長方形で、柱穴は3×4である。

D号は東西3.8～4.3米、南北4.5～5.0米のゆがんだ長方形であるが柱穴は3×4で柱穴の深さも70層と深く、高床倉庫址と推定すべきものと見られた。E号とF号は柱穴も浅く40～50層で、掘立小屋址と推定されたE号は東西3.8～4.0米、南北4.0米、F号は東西5.4～6.0米、南北5.5～6米である。

3 遺 物

① 土 器

○ 土 器 概 説

本遺跡検出の土器類は3片の阿玉台式土器断片、5片の加曾利B1式土器断片、の混入が認められたが、主体をなすものは国分期に比定されるものであり、20個の完形品30個の復元可能土器片の他は断片のまま検出されたものである。土器類は杯形を主体とし壺形、甕形の土器は復元可能土器を含め16個体ほど検出されたが、6号住居址から出土した水瓶は仕上りも美しく灰釉のかかつたもので猿投窯との関連を提示するものと云えよう。また黒書土器も23検出され、解説されたものは(加)18(真)1(泉)こり1(毛)1解跡不詳2の數にのぼった。また杯形の須恵器も復元可能12瓶の断片4蓋の断片2が検出されたが釉のかからないうす手のものが多かった。

第1号住居址北壁床面直上からの検出土器は久が原式の甕形土器の小形のもので底部を欠き、また同時期の土器断片6が床面直上から検出された。



↑ 弥生1号住居址土器出土状況



←弥生5号住居址土器出土状況



←弥生2号住居址土器出土状況



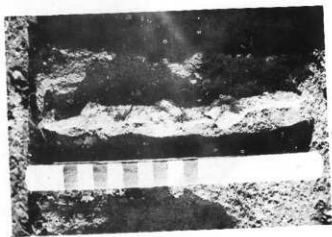
←黒雲土器「真加」「加」

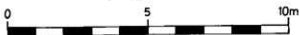
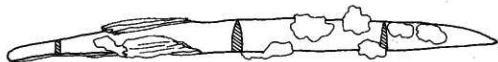
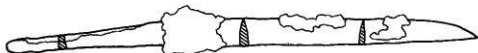
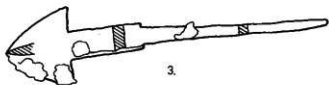
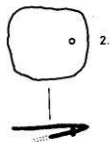
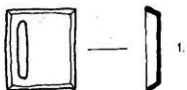


↑ 墨書土器「臬」

② 金ぞく製品

検出された鉄製品は刀子完形3，断片2，鉄鏃完形1，馬具と推定さる。断片1であった。6号住居址出土の刀子は柄の木部をわずかのこしている。保存の状態はあまり良好とはいえない。刀子の形態は平づくり内反りもの2，平づくり外反りもの1共に中蓋に釘穴はなくはまちも。まちと推定され，鋒は平または丸峰がかった造りである破損断面から見ると刀子の鍛造はたて長の鍛鉄？を峰を中心に折りまげた単純な無垢（むく）鍛へと推定されるが本報告で詳細をのべる。また銅製の帯金具2が検出され，用途不明の鉄片わずかの鉄鏃が本遺跡址の金ぞく製品として検出された。



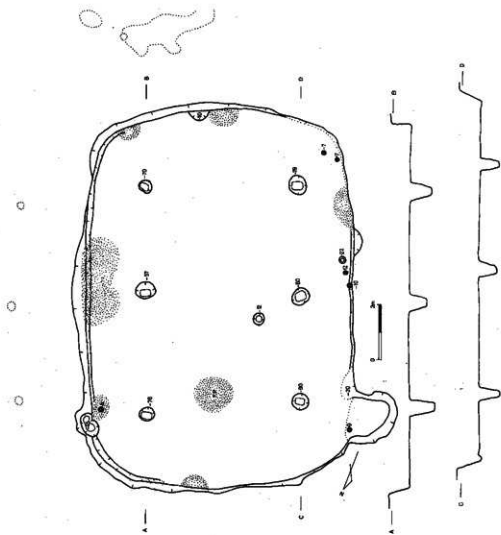


- 1~2 帶金具
 金属器 3 鉄 鏃
 4~6 刀子

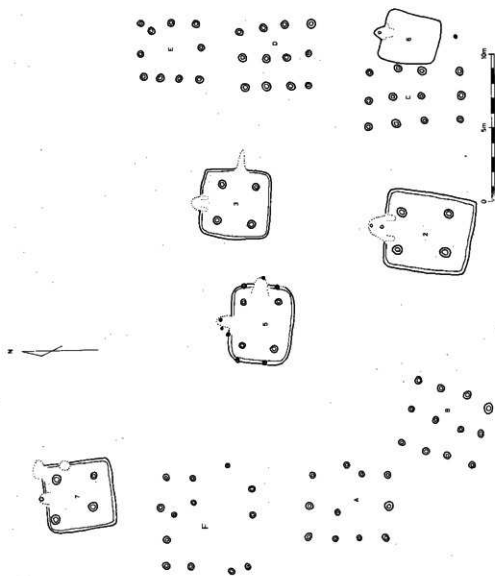
4 名主台遺跡調査団員名簿

調査団長	平野元三郎
調査員	内野美三夫 対馬郁夫 坪井珂依 亀井秋夫 市沼 広 五十嵐成子
調査協力者	後藤雅毅 飯室 茂 土屋有正 宇佐美 昭 伊藤俊之 小沢高之 (早稲田高等学校) 亀谷新一 高橋潤一 段木芳光 (千葉高等学校) 飯田 保 高山卓三 桜井隆之 酒巻義明 富井 晃 石井敏己 長島国昭 山道 広 谷口順吉 川崎文学 渡辺教子 山崎よね 戸部幸子 内藤ちい子 山崎三子 高橋政子 鈴木静子 鈴木由次郎 (上高野サービスセンター) 飯高文寿 長谷川正雄 飯高しづ 長谷川しん 山崎紀子 田中みよ 三門きく 岩井まつ 清宮よね 高崎久男 高崎せつ 鈴木まさ 鈴木文子 山崎しげ子 高橋秀子 山崎けい子 (千葉造園)

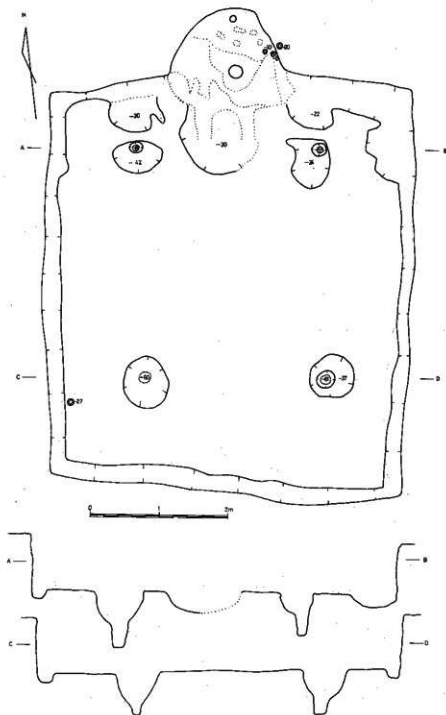
I 遺跡全面及び発掘地形図



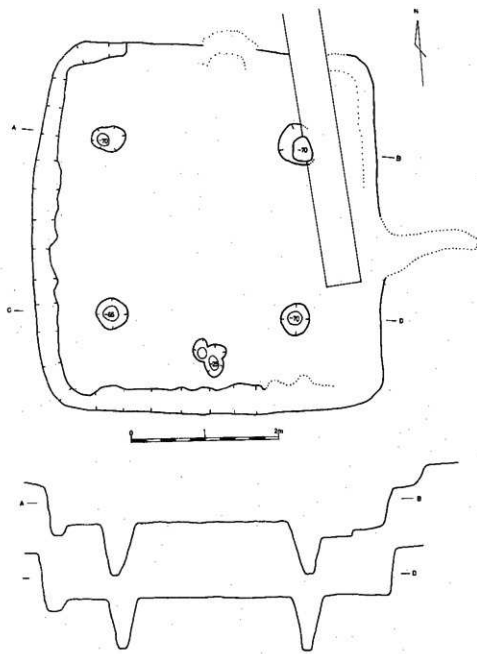
II 遺構分布圖



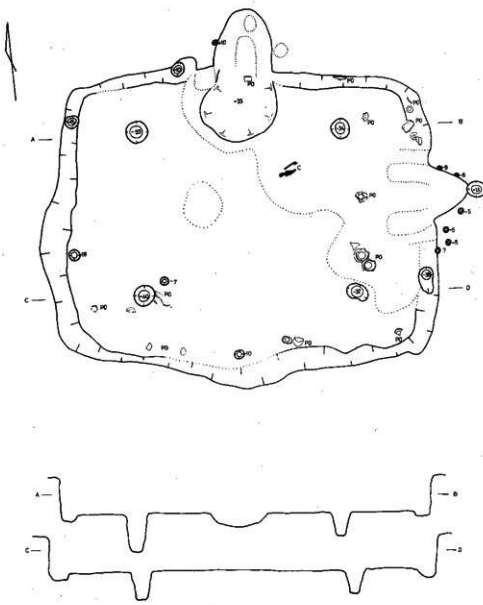
III 2号住居址平面图及び断面図



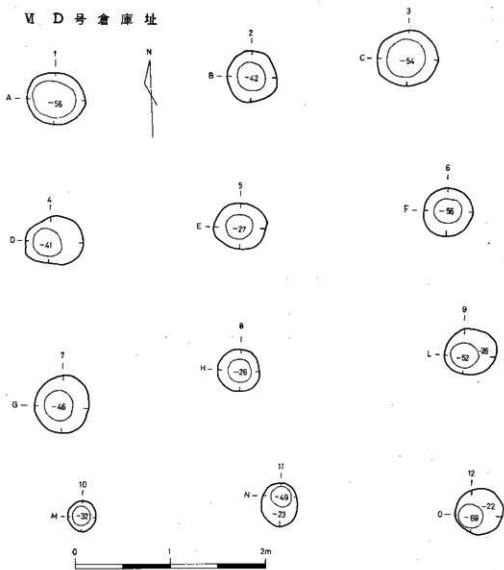
IV 3号住居址平面图及び断面図



V 5号住居址平面图及び断面図



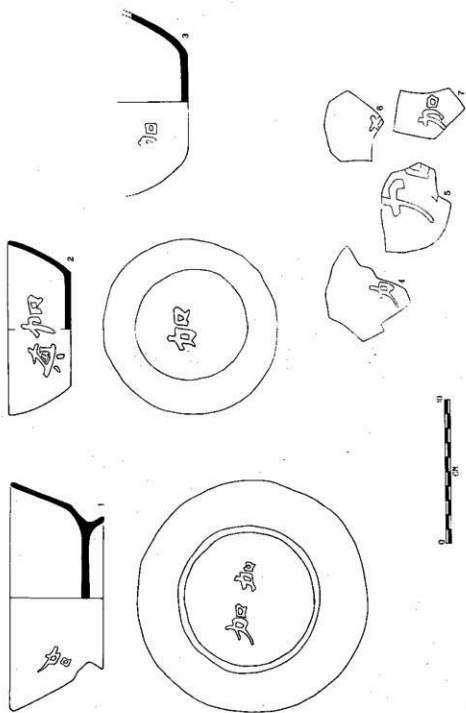
V D号倉庫址



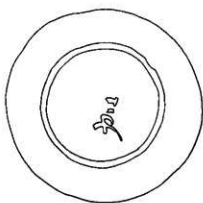
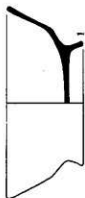
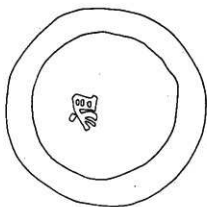
倉庫遺構柱穴間距離 (m)

1~2	2.12	A~J	1.50	7~8	1.86	B~N	4.38
2~3	1.66	D~G	1.73	8~9	2.34		
1~3	3.72	O~M	1.15	7~9	4.20	O~P	1.60
		A~M	4.38			P~L	1.50
4~5	2.0			10~11	2.08	L~O	1.62
5~6	2.17	B~E	1.59	11~12	2.0	C~O	4.22
4~6	4.17	E~I	1.49	10~12	4.08		
		H~N	1.50				

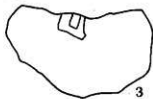
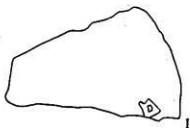
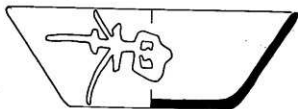
Ⅶ 墨書土器（2号住居址出土）



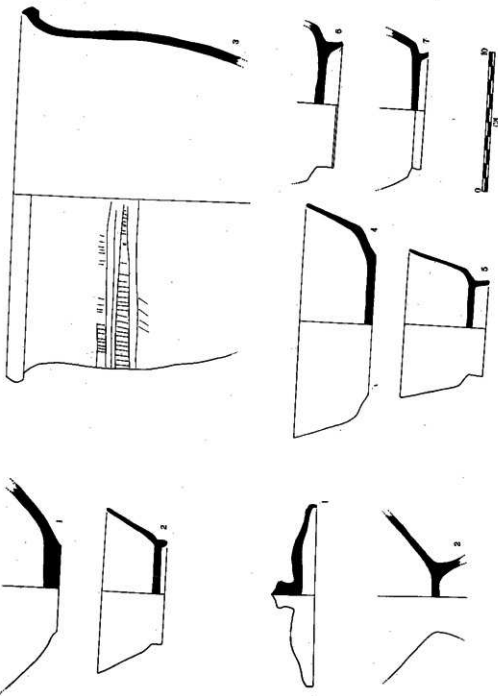
Ⅶ 黑膏土器（3号住居址出土）



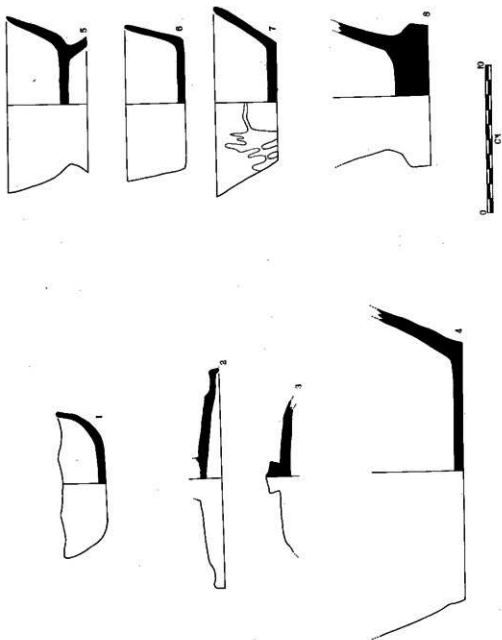
K 墨書土器（5、4号住居址出土及び表土採集）



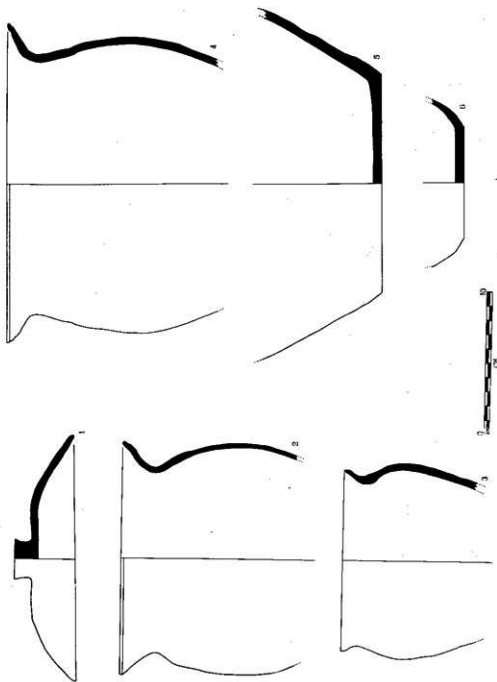
X 1号、2号住居址出土



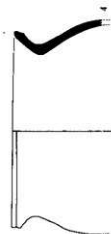
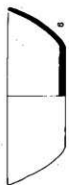
Ⅺ 3号住居址出土



Ⅷ 5号住居址出土



XIII 6号住居址出土



XIV 6号住居址出土

